季節のおまつり

伊賀上野天神祭

遺産に登録された。

山へ峰入りする様子ある。最初の「役行者列」は、修験道の祖・役行者が大峰ある。最初の「役行者列」は、修験道の祖・役行者が大峰が二基の神輿を先導する。それに続くのは二組の鬼行列でが二基の神輿巡幸は古式に則って獅子、鉾盾、毛槍、荷太鼓など

を表す。印を先頭に、 を表す。印を先頭に、 童子、怪士、小面、 ・飛出など)と四天 ・鬼、そして能を嗜ん だ江戸初期の藩主・ だ江戸初期の藩主・ た阿古父尉の面をか なった役行者が威風



ひょろつき鬼

童子、 桃山から江戸初期にかけての能 に敗れ伊豆大島に流された源為朝 迫られた子たちは泣き叫び親にし は迫力ある貴重なものも多い が弓矢を持って登場する。それら す。百余りに及ぶ能面(猩々、 が鬼退治をして凱旋する様子を表 がみつく。もう一つの鬼行列は 殿を務めるひょろつき鬼のしぐさ など)をつけた鬼たちのお練りに 鎮西八郎為朝列」で、保元の乱 大人たちにはユーモラスだが 武将面をつけた勇壮な為朝 獅子口、姥、般若、 四天王 面

一級の美術品である。
大豆に優雅な祇園囃子を奏でなが先頭に優雅な祇園囃子を奏でなが先頭に優雅な祇園囃子を奏でなが

せる。れ、いよいよ秋の深まりを感じされ、いよいよ秋の深まりを感じさ

(写真・文 宮本卯之助



福居町の楼車「三明」の巡行

この国の佳き伝統とともに

宮本む カコ (ばなな

宮本家と職人と

働くのが毎日だったそうです。 た。下には食堂もあり、朝晩はお手伝 みで働いており、作業場の上にあるこ とです。その頃、職人の多くは住み込 ます。一基の神輿が完成するまでに約 製作した時期があったと伝えられてい 時終業後、 いの方々が忙しく立ち働き、職人は五 十畳の部屋で寝泊まりをしていまし いうくらい、年間三六〇基もの神輿を 年かかることを思うと、只ならぬこ 浅草で神輿を見かけない日は 夕食を摂り、夜なべをして ないと

した。職人は終生、職人として技を磨 れてきました。世代が代わり、その当時を き、それは宮本の技として脈々と伝えら にあり、家族同然の付き合いでもありま るのはもちろんのこと、日々の生活も共 当主の宮本家と職人とは仕事を共にす

世代が今 に学んだ 肌で知る 職人たち にかけた 輿の製作 太鼓と神 人も少な したが、 くなりま



昭和三十年代 当時の職人たち

浅草徒然 にっ 3

金龍の舞 十月十八日



浅草寺境内の金龍の舞 (写真:宮本卯之助)

龍が天から舞い降りて観音像を守護したと で漁労中、一寸八分の黄金の仏像が投網に よると、推古天皇三十六年(六二四)三月 である。 かかり掬い上げられた。その時突如として 十八日早朝、 に再建され、それを記念して創られた寺舞 伝えられる。これを土師中知が拝され聖観 「金龍山」に由来している。浅草寺縁起に 浅草寺本堂が昭和三十三年(一九五八) 「金龍の舞」の名は浅草寺の山号 檜前浜成・竹成兄弟が江戸

> 浅草寺境内にてご覧いただけます ております。毎年三月十八と十月十八日に 金龍が舞う姿は、参拝の皆様の歓声を集め 観音様を象徴する蓮華珠に導かれるように ます。太鼓や手平鉦が賑やかに鳴り響く中、 舞手により金龍が境内や仲見世を練り歩き 重さは約八十八キロ、地元青年有志八名の 日にちなみ、金龍の長さは約十八メートル、 寺ご本尊である観音様のご縁日である十八 世音菩薩の尊像であると知り祀った。浅草

祭とともに

秋祭礼

開催される時期に続きます。 ります。今期は休む間もなく文化の秋 際に随行をさせていただく時期でもあ き、ご挨拶をはじめ、神輿や山車巡行の しれません。連日、各地の祭礼へと赴 くださった方も多くいらっしゃるかも 迎えました。宮本の半纏姿をお見か へと突入。様々な催しが色とりどりに 東京近郊は九月に秋祭礼のピークを



赤坂氷川神社祭礼にて

どを願って住民が執り行い、 車祭は「地域文化の多様性を示 まいりました。 されており、これまで各地を訪 金工、漆塗り、染織といった伝 の無形文化遺産に三十三件一括 が二〇一六年十一月、ユネスコ ね歩き、すべての山車祭を見て 統工芸で飾られた山車」と定義 しており、地域の安泰や豊作な で登録されました。これらの Щ (山・鉾・屋台行事)

まれてまいりました。今回の上 あって祇園祭の流れをくむゆっ 野天神祭は、京都に近いことも 地に広がり、その地で独自に育 れています。これらの「山 たりとした雅な祭です。 京都・八坂神社の祇園祭と言わ .車、曳山、山笠などの形で各 · 屋台行事」は、だんじりや 山車を用いた祭の原点は

催されるなど、浅草でも様々な には隅田公園で浅草太鼓祭が開 文化の秋を迎え、十一月三日

宮本卯之助

行

株式会社 宮本卯之助商店

発 東京都台東区西浅草二ーーー 〒一一一一〇〇三五 電話 〇三一三八四四一二一四 企画広報室

www.miyamoto-unosuke.co.jp